

## 梅棹忠夫 講演会『21世紀の人類像』

日時：1997年10月31日

於：同唱館

梅棹忠夫（国立民族学博物館顧問、本学学術顧問）

松田理絵（文化人類学科二回生）

溝内克之（　　　　）

司　　会：青柳清孝（京都文教大学人間学研究所）

コーディネーター：別府春海（京都文教大学人間学研究所所長）

挨　　拶：伊藤唯真（京都文教短期大学学長）

（京都文教大学は、本学学術顧問である梅棹忠夫・元国立民族学博物館長を1997年10月31日に本学にお招きし、同唱館で学生向けに講演をしていただいた。学生が質問をし、それに梅棹先生が答える様式をとった。コーディネーターの冒頭挨拶で学生に梅棹先生の経歴を紹介する意味で相当の時間をとった。然し、本紀要の読者にはその必要は殆どないと察しられ、又、紙面の制限もあり、紹介は簡略にした。その他の部分はほぼ原文通りに残した。）

**別府春海**：数年前に「梅棹忠夫著作集」（全22巻 別巻1）が刊行されました。『探検の時代』『モンゴル研究』『生態学研究』『中洋の国ぐに』『比較文明学研究』『アジアをみる目』『日本研究』『アフリカ研究』『女性と文明』『民族学の世界』『知の技術』『人生と学問』『地球時代に生きる』『情報と文明』『民族学と博物館』『山と旅』『京都文化論』『日本語と文明』『日本文化研究』『世界体験』『都市と文化開発』『研究と経営』という「著作集」の題だけでわかりますように、先生がタッチしていない分野は殆どないと思うぐらい、ものすごく幅広くいろいろ書いておられます。こういった点におきまして、梅棹先生は日本の人類学者と見るよりも、むしろ日本のインテリと言ったほうが正しいのではないかと思います。

これから梅棹先生にいろいろなご意見、コメント、見解をいただきたいと思います。私もこういう座をもたせていただきまして、非常に自分の勉強になると思いますので、どうぞよろし

くお願いいたします。

今回の講演のテーマは「21世紀の人類像」ということですから、21世紀に我々の世界は、人類の世界はどうなるのかということを考えていきたいと思います。そしてそれについて、梅棹先生のお考えを聞かせていただくということになります。

21世紀といいますと、いろいろな予測がされています。一つは、21世紀は情報の時代である、というふうに言われています。テレビのみならず、コンピューター、電子メール、インターネットと、情報が洪水のように出てくる時代になってきました。そういう時代を迎えて我々はどのように対応していくのだろうか、という所からディスカッションを始めていきたいと思っています。

梅棹先生の「著作集」の中にも、『情報と文明』という巻があります。それほど先生は情報に関わった論文をいろいろと発表しておられます。ですから、21世紀の情報世界ということに対して、いろいろとコメントしていただけるの

ではないかと思います。いろいろと質問をしていただくために、二回生の松田理絵さんと溝内克之さんに壇上に上がっていただき、ここで質問をしていただくことになっております。では、松田さんから始めていただけますか。

**松田理絵：**さきほど別府先生がおっしゃったように、21世紀は情報社会がさらに発展すると言われています。伝達手段も口頭によってだけでなく、テレビやパソコンの普及によって、一度に大量に伝わって、その速さもますます速くなっています。でもそのために、量や速さに人間が踊らされてしまって、人間が創っている情報によって、さらに人間が創られているという状況がおこって、情報の影響力がますます大きくなっていると思うのですが、これについてどう思われるでしょうか。

**梅棹忠夫：**本来なら私は、こういう所では完全原稿を持ってきてお話しするのが順序でございます。しかし、現実には盲人でございますので、メモを書くことも読むこともできません。それで、このような形でご質問に応じてお話しするという方法をとらせていただきました。したがって、私自身はメモも何もありません。もっぱら、別府先生と、お二人の学生さんにお任せしてあります。引っぱりまわしてください。

### 情報の時代

まず、情報ということについてですが、ちょっと自慢話をさせてください。情報の時代の到来というのを、世界でいちばん先に言い出したのは私でございます。私は1963年に「情報産業論」という論文を発表しております。情報の問題について、世界で非常に早く、そのような時代の到来を予言したのです。情報の時代の到来については、アメリカのダニエル・ベル、カナダのマクルーハン、それから、やはりアメリカのアルビン・トフラーという人達がありますが、かれらよりも私の方がだいぶ早いです。一説によりますと、私の論文が英訳されて密輸出されたんだという説があります。その真偽は知りませんが、とにかくある種の影響は及ぼしたかもしれません。

どういう趣旨であるかと申しますと、人類の歴史を振り返ってみますと、ずっと古い段階では、とにかく、人類はおなかが減ってしょうがない。おなかを膨らすというのが第一で、それで営々として働いて、狩猟をやり、それから農耕をやった。畑を耕して、穀物をつくった。これが第一段階の農業の時代です。その後、筋肉の作用を確実にするために、さまざまな動力や機械が登場します。これで工業というものが始まる。それが第二段階で工業の時代です。いまは第三の段階に来たということです。第三の段階と申しますのは、脳神経系感覚諸器官が活動する時代でございます。それが、すべて情報という形で出てくる。人間生活の、あるいはもう少し限定的に言うならば、経済的活動の主流を占める時代が来るんだというのが「情報産業論」の趣旨でございます。

生物学的に申しますと、まず最初のおなかを膨らせるということは栄養の問題です。人間の身体で申しますと、内臓、特に消化器官系の活動を拡張したものです。これが農業の時代です。その次にくるのがエネルギーです。あるいは、人間の筋肉のはたらきを延長したものです。さきほどの消化器官系というのは、発生段階で言いますと人間の内胚葉諸器官の展開です。その次に、筋肉骨格というのは中胚葉です。胚葉というのはご存じでしょう。最初の受精卵が分割して細胞がどんどん分れてくる。その途中で最初に内胚葉ができます。それから、中胚葉ができてくる。外胚葉からできてくるのが、脳神経系感覚諸器官です。これの活動の拡充というのが情報だ、ということなのです。いわば精神の問題です。産業でいうならば、農業は消化器官系の話。第二段階は、筋肉骨格諸器官の話。第三は、いよいよ脳神経系感覚諸器官の話です。これは精神の問題なのです。だから、精神の産業化が始まるんだというのが、情報の時代の到来ということの意味です。精神産業ということばを使っておりますが、精神産業の時代が到来するんだということを申しあげたのです。

もちろん、第二段階の時代、工業の時代が来

ても農業は消えておりません。工業によって農業はますます盛んになりました。同じように情報産業の時代が来ても、工業および農業は消えません。ますます盛んになってきます。しかし、全体をリードしていく、文明の骨格を造っていくのは情報なんです。そういう時代が来ましたよということなんです。だから、これは人類史の非常に大きな革命です。つまり産業革命によって、工業の時代が開かれた。その次は現代、情報革命によって、情報産業の時代が開かれるんだという考えでございます。私の「情報産業論」という論文は1963年に出しております。それからすでに30数年になりますが、私の言ったとおりになってきました。情報産業ということばも私の造語でございます。それまでは、そんなことばはありませんでした。現在では、情報産業というのは、多少、私の元の意味からずれて、まるでコンピューター産業のことをいうような使われかたもしておりますが、それは私の用法からいえば、誤用でございます。情報産業とは、精神の産業化の時代なんだというふうに考えていただいけこうだと思えます。

どの範囲のことが情報産業に入るのかと言いますと、非常に広大な分野が情報産業に入ります。例えば、歴史的に見ますと、情報伝達者というのは古代からあるのです。だいたい坊さんというのは情報伝達者です。あるいは、神官というのもそうです。これは神さまが発するメッセージを人類に伝える、情報を伝達する仕事ですが、その時代からずっとあるのです。その後、それがいろいろな産業を生みだしていくのは、中世・近世以後になります。近代に入ってから、ジャーナリズムの発達です。新聞や雑誌、それからさらに現代に入りますと、電波が加わってきます。ラジオ、テレビという、あたらしい情報メディアが用意されて展開する。この変化は、たった1世紀のことです。いや1世紀にならない。私は1920年の生まれでございますが、私が小学校の1年生か2年生の時に、ようやくラジオの鉱石受信機が家庭に入りだした。それから60数年のあいだに、驚くべき発達を遂げたものです。これはまだまだ展開しま

す。そういうメディアの発達、それからメディアを利用してのさまざまな情報活動の発達、これらがどんどん展開していきます。21世紀はもちろん情報の時代に入って、ますます情報というものが世界を動かす、というふうになると私は考えております。

今のご質問の中には、多少情報の時代についての否定的ないしは悲観的なニュアンスのご発言があったと思いますが、そんなことは考えなくてもよろしいです。情報の時代によって、ますます未来は開けていくものと私は考えております。文明の進歩については、悲観的な見方がかならず一方では出てくるものです。20世紀戦後の日本につきましても、例えば家庭電化——電気洗濯機などが出現したところには、否定的な見解がたくさんありましたが、今ごろそんなことをいう人は全然いない。家庭に電気洗濯機があることは、当たり前のことなんです。その内に世界が驚くべき程度に情報の波に覆われてくることは、当然のことです。人類は、その波に乗っていかなければならない。もちろん、いろいろ否定的なことを探していけば、どんなことにも否定的な面はありますけれども、それは別に心配することはないと私は思っております。情報の時代が到来したということです。

#### 異民族の認識

**別府：**どうもありがとうございました。情報の時代は、すでに到来している訳ですが、それが精神産業にまで発展してくるという大変刺激的な見解です。こういう方面についてはのちほどお伺いしたいと思います。溝内さん、質問ありますか。

**溝内克之：**今、先生が情報社会で明るい未来があるというようなことを最後に言われましたが、まだ僕の中では情報の洪水に流されているような気がするのです。その情報の多く流れてくるなかに、他文化の情報が今現在、多く流入してきていると思います。そこで、やはり事実でない情報も入ってきたり、他文化への認識の違いが生じたり、他者に対する偏見、さまざまな問題もあると思います。先生は、人類学者は

この問題に対して、どのようなことが出来ると思われますか。また、しなければならないとお考えでしょうか。

**梅棹：**しなければならないという問題については、私は多少答えを留保したいと思います。と、申しますのは、私は人類学者でございますけれども、学問というものは、基本は、ゾレンsollenと違うと考えています。ゾレンというのは、should「そうであるべきである」という話なのです。これはよく考えておいていただきたい。私共のやってきた学問は、基本的にはザインseinの問題であります。存在の世界です。なにがあるのか、なにをどう認識する、認識の問題であって、当為、なにをするべきか、sollenとかshouldの問題とは違うのです。だから、どうあるべきかということとは、私は答えを留保したいと思います。それは、これからの若い人達、あるいは未来の人類がそれぞれの状況に応じて、自分はこうあるべきだと考える方向でお考えください。今ここで、人類が行くべき姿を私は呈示できません。しかし、多分こうなるかもしれないというような一つの予測、あるいは、現状はこうなっておりますよというザイン、存在の姿を呈示することは、学者に課せられた任務です。倫理学は知りませんが、私も経験科学をやっている人間は、いちおう自分の立場からゾレンの問題は排除しておきたいと考えております。だから、私の話などを聞いても、これからどうしたらいいか、どうすべきであるかとかいうことは何も出てきません。それは皆さんが自由にお考えください。

ところで、他からの情報の流入の問題ですが、19世紀までの情報伝達というものを考えますと、異民族はどういう生活をして、何を考えて、どういう文化を持っているのかということについては、お互いに非常に情報が乏しかったのです。だから、それぞれの民族集団は、孤立して生活していた。民族集団ということについては、みなさん、文化人類学をご専攻なさってる人達が多いかと思いますが、これはもうはっきり承知しておられるでしょう。民族というのは、文化を共有する人間集団のことです。

## 民族の問題

ついでに、ここでごく簡単な人類学入門のようなことを申しあげますと、民族はいわゆる人種とはっきり違います。黒人とか白人とか黄色人種とか言ったり、生物学の問題で皮膚が黄色いとか、目の色がどう、髪の毛がどうか言いますが、これが人種の問題です。民族と言うのは文化の問題です。同じ文化を共有する人達の集団が民族です。

もう一つ紛らわしいのは、国民という概念でございます。これは政治的な問題でございます。民族学あるいは文化人類学の問題ではない。どこのパスポートを持っているか、どこに税金を納めるとかの政治の問題です。

その中で私たちが特に問題にしていきたいのは、民族の問題なのです。19世紀までは、民族がそれぞれ孤立してあまり交渉がなかった。お互いに相手の存在をあまり知らないでも済んだわけです。19世紀の後半ぐらいから急速に異民族のことがわかりだして情報もたらされると、世界にはどういう人間がどういう具合に住んでいるか、ということがお互いにわかってきたわけです。わかってきた以上は、問題にせずにはおられない。例えば、昔は、アメリカ大陸に住んでいるのは、人間であるかどうかさえ分からなかったのです。15世紀末に、ヨーロッパの人達がアメリカ大陸を発見する。そこに人間らしき生物がいるのを見て、びっくりするわけです。これが人間なのかどうか。もしこれが人間ならば、キリスト教の人達は、この人達に神の恩恵を施さねばならないと考えたのです。したがって、キリスト教を布教しなければならない。これが人間でないならば、布教の必要がない訳です。大論争のすえ、あれはやっぱり人間だということになった。16世紀以降は、そうして布教が始まるわけです。

少々脱線してよろしゅうございますか。

**別府：**はい、どうぞ。

## キリスト教の布教

**梅棹：**こうして、アメリカ・インディアンの世界に対してキリスト教の布教が始まるわけで

す。まず、キリスト教の宣教師が入っていった、キリスト教の神様をひろめてある。その次に入ってくるのはお酒です。アメリカ・インディアンに酒を飲ませると、へべれけになってひっくり返る。始めはたぶんラム酒でしょうか。スピリットのたぐいです。これはおもしろいんですが、始めは宣教師、次はお酒の業者。どちらもスピリットを売っているということです。神様もお酒もスピリットの問題です。

こうして、アメリカ・インディアンが人間として扱われた。それから、アメリカ大陸にはいろいろな人間がいるということが分かってきた。情報が入ってきて、人間像、人間とはこういうものだという認識が非常に拡大するのです。それは16世紀以後です。

当時、やはりヨーロッパからアジアに向かって宣教師がやってくる。日本に非常に早くやってきた宣教師はフランシスコ・ザビエルです。この人が16世紀中頃にやってきます。彼は日本という国があるということを伝え聞いて、そのころポルトガルの植民地であったゴアから日本に来るわけです。そして、鹿児島から山口に到着する。山口は当時、大内家の領土でした。ザビエルは大内の殿様にたきつけて布教をやろうとするのですが、はかばかしくいけません。そこで京都での布教をめざして、船で堺をへて難波に上陸するのです。京都へ入って布教しようと思うのですが、けっきょく、うまくいなくて大内へ帰るんです。ザビエルは非常に早くに来たキリスト教の宣教師で、それ以後に、かなりたくさんのキリスト教宣教師が入ってきます。

日本ほどキリスト教が、費用と時間をかけた国は珍しい。そしてその結果、これほど惨めな失敗をした国も珍しいのです。全然歯が立たなかった。いまは日本にも、そうとうキリスト教徒がいますが、キリスト教布教の歴史の中では、日本はちょっと特異な例なのです。惨敗を喫した。今日でも、キリスト教の学校もたくさんありますが、全体として、費用と効果からいえば失敗でしょう。なぜか。この京都文教大学は知恩院さんの学校だから言うわけではございませんが、理由は仏教があったからです。

当たり前のことなのですが、しっかりした宗教がもともとあった国には、新しい宗教はなかなか入れない。世界においても仏教国では、ほとんどキリスト教は浸透していません。仏教というのは、それだけしっかりした論理体系を持っていて、キリスト教に対抗できたということなのです。明治以降は宗教の自由化が行われますから、かなりの程度にキリスト教が入ってきますけれども、全体とすれば、日本は現在でも仏教国です。キリスト教国になったとは言えない。

### 近代日本の始まり

日本は仏教国であります、日本の近代はいつはじまったのか。皆さん、いつごろとお考えでしょうか。1868年、明治の革命で日本は近代に入ったんだ、というのが普通の考え方でございます。しかし本当にそうでしょうか。日本の近代というものは、はるか昔から始まっております。どこで始まったかと言うと、ちょうどヨーロッパに於いて宗教改革が行われた、その頃です。日本においても、それまで絶対的な權威を誇っていた仏教を否定する動きが16世紀後半には始まっています。顕著な事例は、信長による比叡山の焼き討ちです。お寺を焼き討ちしても別にバチがあたるわけでもない。その時に、中世的な宗教の絶対的權威というものが壊れた。私は、そこが日本の近代の始まりだと思っているのです。だから日本の近代を始めた男は織田信長でございます。それ以後の織田・豊臣の織豊政権、それから、徳川による江戸幕府はもうearly modernです。つまりフランスなどでも、その頃をearly modernと言っていますが、近代初期なんです。日本の近代は、私は16世紀後半以後に始まったと考えております。17世紀、江戸に幕府ができて、いわゆる幕藩体制というものが日本の全体を覆うようになってからは、日本はもうすでに近代段階に入っているのです。そして、いろいろな改革が進行いたしまして、最後の政治的改革的仕上げが1868年、明治の革命だ、というふうに私は見ております。

ずいぶん脱線しましたが、もうひとつのご質問

問は、外からの情報の流入ということでしたか。

**溝内：**はい、その間で、人類学者がどうその情報を翻訳していったらいいか。自民族に伝えていくかということです。

#### 文化人類学とフィールド・ワーク

**梅棹：**外からの情報がはいりだしても、人類学者が登場するのは、まだ大分あとでございます。ヨーロッパでも初期の19世紀的段階での人類学者というのは、いわゆるアームチェアー・スクール、安楽椅子学派と申しまして、人類学者は書斎で安楽椅子に座っている。情報は、当時すでに世界に散らばっておりました宣教師たちがもたらしたのです。キリスト教の宣教師がアフリカやアジアの各地に潜入して、そこから通信を送ってくる。それと軍人です。各地に出かけていったヨーロッパの軍人達が、本国へ報告書を書き送る。そういう手紙類を分析して、よその民族のことを調べた訳で、民族学者や人類学者自身はアームチェアーに座っていた、そんな時代がずっと続きます。

じつは、日本の人類学・民族学も初期の段階はそのとおりで、現地へ出かけていくというようなことを考えた人はいなかった。すでに日本の軍事的拡張は、1860年代から始まります。日本の国民国家が成立してから間もなく、日本の帝国主義的拡張が始まります。それが第一に火を噴くのが、西郷隆盛の征韓論です。明らかにこれは侵略意志です。朝鮮を取れという、驚くべき侵略意志が、もうすでに出てくる。そうして各地から集まった情報で、日本の人類学者も分析をやっておった。残念ながら、江戸時代には日本には民族学・人類学はありません。多少アイヌの研究があります。アイヌについては、かなり詳しい研究がすでに17世紀段階から進行しております。しかしそれは、体系的な人類学あるいは民族学にはなっておりません。そういうものがでてくるのは明治の中期以後です。

19世紀末になりますと、例えば、先駆的な人物としては、鳥居龍蔵という人が出てきます。この人は東アジア一帯を、実によく歩いてい

る。中国の西南部、今の雲南省から四川省にかけて足を延ばしています。そして、朝鮮から満州・蒙古というような所を歩き回っている。驚くべき話ですが、鳥居先生は夫人のきみ子さんと一緒に歩いておられる。しかも赤ちゃんを連れているんです。モンゴルに入った時には、ウシに引かせた荷車に赤ちゃんを乗せて、一家3人でした。

こうして鳥居先生は明治の末期から大正にかけて、1920年くらいまで各地を歩いています。これが日本における実証的な民族学研究の始まりです。それからアイヌについても、かなり精密な研究が始まります。台湾が領有されると、台湾の高砂族の研究が始まります。というような形で、20世紀に入ってから日本の人類学者・民族学者の活動が軌道に乗り始める訳です。

それでもなお、フィールドへ出て諸民族の実態をわが目で見るということは、必ずしも一般的でなかったのです。そういうことをやらなければ民族学・人類学にならないんだ、現地へ行行って自分の目で観察して自分の手で報告を書くことが人類学の本道だという認識が確立するのは、1930年代以後でございます。極端に言うならば、実際に、世界中の民族について、自分で歩いて行って、自分の目で見て、自分で記述をするということが軌道に乗るのは戦後です。今日では、文化人類学をやる人にはフィールド・ワークは付き物です。フィールド・ワークをやらない文化人類学はほとんど不可能です。机の上で、アームチェアーでやっているなんて、それはもう、まさに18世紀、19世紀段階に逆戻りしているのです。

今日の文化人類学はすべて現地研究、フィールド・ワークでございます。それはしかし、比較的新しいことです。昔からそういうものではありません。みなさんご存じでしょうが、世界に民族はいくつありますか。私どもは、3000以上あるというふうに考えております。つまり、3000以上の文化集団に分かれて人間は生きているのです。その3000以上ある文化を一つ一つ現地で、フィールドで現実にあたって、それを記述していくという仕事、これが民族誌すなわち

エスノグラフィーの仕事です。これが大分進行しまして、今日エスノグラフィーが全くできていない民族は、ごく少なくなりました。しかし、まだあります。しかも、それができていると言いましても、大ざっぱにできているわけで、詳細につきましてはこれからの仕事でございます。だから当分まだ人類学者は失業しないですみます。いくらでもフィールドがありますから、どうぞみなさんどんどんやってください。

これで、20世紀後半になってから、世界の人間はどのように分かれて、どういう具合に生活しているのか大分わかってきた。つまり20世紀の人類像がぼんやりとわかってきた訳です。それに基づいて今後は、21世紀の人類像がどうなっていくだろうかという予測を考えていくことになると思うのです。まだわからないことは一杯あります。それが、これからの私たちの仕事でございます。

**溝内：**ありがとうございます。まだ未来が明るいというので、ほっとしました。

### 情報の創出と編集

**別府：**19世紀の人類学者が安楽椅子人類学者だというふうにおっしゃったので思い出したのですが、有名なエドワード・B・タイラーの逸話がありまして、これは19世紀中葉の非常に有名なイギリスの人類学者です。ある日、友達が彼の書斎に飛び込んできまして、今ロンドン港にアフリカから黒人が一人船に乗って入ってきた。見に行かないかと言いましたら、タイラーはそんなのは関係ないと言って、その人を返したという話があります。

情報について私自身も質問があります。梅棹先生は『知的生産の技術』という本を既にご書いておられまして、そのなかで梅棹先生は情報というものをどのように編集するかということと、情報をどのように創造していくかという2つの面があるというふうにおっしゃいました。その編集と創造をどのように統一していくか、統一的に理解するかという問題があるかと思えます。情報の編集と創造の関係について、お聞か

せただけませんか。

**梅棹：**世の中で行われている情報の過程を考えてみますと、幾つかの段階があります。一つは情報の創造という段階、それから、情報の蓄積という段階がある。そして情報の検索という段階がある。それからもう一つ、情報の流通という問題がある。情報の創造というのは非常に難しいです。あるいは、ごく簡単なことかもしれません。次から次から起こってくる事象、事柄を、次から次からと記述していけば、これが全て情報になります。なかには創られた情報もそうとうあります。例えば、今日、日本で端的に見られる創られた情報の例はプロ野球です。あれは情報を創り出すためにやっているわけです。それでどちらが勝ったか、何点勝ったかという全く創られたものです。始めからあるものではない。これも情報としての価値を持っています。

今日の社会では、かなりの程度に情報は創られておりますが、本当の創造的な知的情報というのは、ちょっと性質が違いまして、そう簡単に出てくるものではない。しかし情報は全体として、やっぱり創られていっているのです。今度はそれを文字あるいは映像という形で蓄積すると、それがいわゆるドキュメントになるわけです。膨大なドキュメントが、今日蓄積されております。それも社会によって非常に蓄積の乏しい社会もありますし、膨大なものを持っている社会もあります。日本の場合は幸か不幸か、かなり蓄積が大きいほうです。これは、古代以来の文献の量から言いましても、世界有数の文献の量を誇っております。さらにそれを文字あるいは映像の形で流通させて、これがどんどん蓄積されていっております。だから、在庫品、倉には相当の財産がたまっているのです。

しかしこれが、未来の生活にどういう具合に役立つのかということになりますと、中から必要な情報を取り出す仕掛けがいるのです。これが検索の問題です。これは今、必ずしも非常に良くできているとは言えません。過去に於いてこの問題について、どれだけのことが分かっているのかということ、ぱっと調べようと思っ

ても、簡単に調べがつかない。膨大な蓄積があるにもかかわらず、必要なものがそのファイルからすっと取り出すことが出来ない。この検索の技術が、今後ますます必要になってくる。幸いにしてコンピューターという便利な機械が出現しましたので、かなりの程度に検索ができるようになりました。今後は情報の蓄積、例えば図書館などは情報蓄積型の装置ですが、こういう装置群と、コンピューターというような検索機械装置群とが両様あいまって、どういうぐあいに展開していくのか楽しみでございます。

いわゆる文明世界は、ずいぶん情報の蓄積をやってきてはおりますが、その情報蓄積の間にさまざまな問題群が発生しております。これは少しずつ解決していかなければならない。例えば、今日世界的な情報は、まだ単一の規格では行なわれておりません。言語でさえも統一されていないのです。世界の言語は先程民族の数を3000以上と言いましたが、だいたい民族の数は言語の数と考えてよろしゅうございます。地球上の人間は、3000種以上の言語で情報を交換しているのです。その中で文字のある言語は、10分の1あるかないかです。その言語によって、否、文字によって記録された情報群というのは、それぞれに蓄積されているわけです。その中で必要なものをすっと取りだせる装置がまだできておりません。これが今後の人類史のひとつの課題です。

**別府：**情報処理の時代になってきますと、先生も他の所で書いておられましたけれども、情報処理に当たっては、男女の差は無い。力がいるわけでもない。頭さえ使えばいいと言うことで、将来は女性の進出がおおいに期待されます。21世紀の女性の立場ということで、松田さん、お願いします。

#### 女性の出番

**松田：**これまで男性だけがやる仕事とされてきたものにも、女性が進出したり、男性が家事に参加したり、というふうに男女の区別が無くなるような世界の大きな流れがあると思います。このような現象の要因は、何だと思われるで

しょうか。また一方、日本では男女の差別みたいな、女性の進出を阻止する流れも大きく、他の国々に比べて女性の進出がちょっと遅いように思われるのですけれども、これに対する解決策には、どのようなものがあると思われるでしょうか。

**梅棹：**私の「著作集」全22巻のなかに『女性と文明』という巻がございます。これは人類における女性の立場・役割がどのようなものであって、どういう変化が起こりつつあるかということを論じたものですが、世界各国の中で、どこも同じようには進行はしておりません。国によってかなり違います。いわゆる女性解放が一番進んでいるのはどこでしょうか。ちょっと簡単には言えないと思いますが、案外モンゴルくらいかもしれない。遊牧民の女性はたいしたものです。全員ウマに乗ります。競馬がございますが、モンゴルの競馬の騎手は、半分は女の子です。それが男の子と同じように、はだかウマに乗って、かけっこをする。じつによく働く。それだけに女性の地位も高いのです。

日本は13世紀以来、封建体制でやってきました。封建制における立役者は侍です。侍というのは戦士集団です。権力者に雇われて戦争をするのが侍の役目です。これは原則的に女性は参加していない。日本の女性史において女武者というのは出てきます。昔から有名なのは巴板額です。巴というのは、源義仲すなわち木曾義仲の夫人です。それが鎧を着て鉢巻きを巻いて、長刀をもって従軍していた。板額と言うのは、越後の城氏という武将の娘なんです。彼女はどういうことやったか私はよく知りませんが、これが女武者の典型になっております。

日本では、それくらいしか事例が無いのですが、これが例えば東南アジアなどに行きますと、いくらでもあります。女武者、女の将軍が奮戦しているわけです。この武力的対決の場面に、実際女性が出てくるのです。ところが、日本のような封建体制がしっかりした所では、女は戦場には出ないで後ろへ隠れている。奥様になるわけです。奥様ということは、表に出ないということです。これは武家社会の特徴なので



す。武家というのは封建体制の担い手です。武家の文化は女を隠す文化です。女を奥へ入れて、表に出さない。表は全部男の世界です。これで700年ほどやってきました。それで日本の女の地位は低いままにおかれてきました。ただし、これは武家の世界の話です。それに比べて、農民・商人の世界では、女の地位ははるかに高いです。それでも全体の秩序が武家中心に組み立てられておりましたから、やはり日本の場合、女性の地位がちょっと低い。しかし、世界的に見て非常に低いかどうかは疑問があります。社会的活動はあまり許されていない。それでも、この状況を打破したのは、やはり情報産業社会の到来です。

情報産業が出だしてから、急速に女性の職場は広がりました。いちばん最初に女性の職場がおおいに広がるのは学校の先生です。明治になってすぐに、女教師というのが職業的に確立します。情報産業で、もう一つ非常に早くに女性に職場を開放したのは、電話の交換手です。それからさらに雑誌記者です。新聞記者はちょっと遅れます。雑誌のほうが早かったと思います。女性の職場が情報産業によって切り開かれていくのです。どういうことかと言うと、情報産業は一番腕力がいらぬ。腕力で勝負したら、たいだい男の勝ちです。まともに喧嘩して、男に勝てる女性はまずいない。腕力・暴力においては男の方が強いです。しかし、知力においては、すこしも遜色はありません。少なくとも女性と男性との知的な能力差があるということは、科学的には証明できないと思います。完全に対等にあたる社会なんです。知的職業は、情報産業によって大量に創りだされつつあるということです。

だから私は、工業の時代から情報産業の時代への大きな推移のなかで、いよいよ女性の出番がまわってきたというふうに感じております。21世紀はたぶん女性の世紀になるでしょう。女性が男性を圧倒するかどうかはわかりませんが、少なくとも共同作業で相互扶助的であり、対等の社会に次第に近づいていくのではないかと考えております。少し楽観的すぎるでしょう

か。いろいろ不平不満をお持ちの女性のかたもたくさんおられるかと思いますが、私は大局的にそう見ているのです。

ついでに付け加えて申しますと、日本においては、イエ制度が女性の自立・社会的活動を妨げる大きなバリアーになっていた。ところがこのイエ制度が戦後のさまざまな改革によって、あっという間に崩壊した。今なおイエ制度というものを頑固に主張するお爺さん・お婆さんがいますけれども、ほとんど無くなった。あの強固と思われた日本の家族制度・イエ制度が、かくも脆くも崩壊したのはどういうことなのか、考えてご覧になったことがありますか。何故こんなに脆くも崩壊したのか。

私は一つの答えを用意しているのです。それは、もともとイエ制度というものは存在しなかったんだという考えです。これは明治民法というものが創りだした虚構であったのです。明治民法は明治の前半にできたものですが、民法を武家法で作ったのです。武家法のイデオロギーに従って、民法を編成したということです。フランス人のポアソナードという法律学者を雇ってきまして民法をつくったのです。お雇い外国人です。これが非常に近代的な民主的なものであった。それに対して、日本の法律学者が強硬に反対した。「民法出でて、忠孝滅ぶ」という有名な文句がありますが、これは日本の古来の美徳である忠孝を滅ぼすものだ、つまり、イエ制度を破壊するものだという意見があったんです。そして、イエ制度を、むしろその時に確立したのです。

そのイエ制度のモデルになったのは武家法です。お侍の、さきほど言いました封建武士の倫理体系であった。実際にやってみますと、百姓・町人のとはひどく違う。百姓・町人は、もともとそんなものは持っていなかったのです。さきほど言いましたとおり、奥様というのは武家のものです。百姓・町人は、奥もへちまもあるものですか。奥様というものが出現したのは、日本におけるイエ制度が確立した時期でした。だから、明治の20年代から終戦後の改革に到るまで、わずか50～60年しかない。それくら

いの伝統しかなかった。日本におけるイエ制度は、ごく根の浅いものであったと私は見ているんです。こういうものですから、戦後の改革によって脆くも崩壊した。いまイエ制度を頑張る人はいないでしょう。

しかしなお、昔からの沈殿物がいっぱい残っております。それは明治以後、武家法にのっとり、イエ制度イデオロギーによって学校教育もすべて支配されていたからです。例えば女学校です。京都文教大学の前身もそういう女学校であった。そのモットーは良妻賢母です。良妻賢母という名のもとに、武家法の奥方の役目を押しつけられていったのです。それでいろいろな問題が起こったわけです。幸いにして、日本はその後遺症がわりに軽く済んでおります。インドのような悲惨なことはありません。中国もかなりひどいですが、インドは女性差別がひどい。イスラーム諸国もそうです。イスラーム諸国の女性が不幸であるとは私は申しません。それなりの幸福はあると思います。社会的進出という点では、全然違います。日本はバリアーが少ない社会です。やろうと思えばやれる社会です。まだまだ障害・差別はありますけれども、それは徐々に解消していくに違いない。100年かかったらそうとうに変わるでしょう。

幸いなことに日本には、ある種の伝統があるのです。例えば、女性の投票権が認められたのは戦後で新しいことです。世界的にみても、これはそう古いことではありません。どこから起こったかと申しますと、ニュージーランドからです。ニュージーランドからオーストラリアへ、それからヨーロッパ、イギリス本国へ渡って、次第に女性の権利が、参政権が認められていくのです。だいたい、労働法にしても、労働時間の制限などさまざまな近代法は、ほとんどニュージーランドやオーストラリアからでてくる。非常におもしろい現象ですけれども、それがヨーロッパに飛び火して、段々ある意味で怠け病になっていく。それがアメリカへ飛び火して、やがて英国病から米国病になり、日本病になっていく。こうして怠け者が増えていきます。

一面では今まで虐げられていた、隠れていた

人達の能力を引き出し、権利を与えていくという運動でもあるわけです。女性についても参政権が認められたのは20世紀に入ってからのことです。日本には多少その伝統がありました。これはあまり知られていないことですが、例えば京都・大阪には武士がおりません。京都にお公家はおりましたが、お公家は何の役にも立たない。飾りものみたいなものです。京都も大阪も完全に町人の世界、町衆の世界です。町衆というのは、ヨーロッパのことばに翻訳すれば、都市ブルジョワジーです。都市ブルジョワというものが支配している。そこでは女の権利が、完全に認められていたんです。

例えば、私は先祖代々の京都の町衆でございますが、京都市民の伝統としては、江戸時代から女に参政権があります。一戸一票ですから、女でも戸主であれば一票を行使できます。当時は、市長は総年寄り、市議員は年寄りと申しましたが、市長および市議員の選挙には、女性も戸主であれば権利を行使しているんです。男女の区別はありません。戸主権の問題です。このようなことは、以外に知られていない。日本の町人社会では、このような伝統があるのです。それで何の不思議もなく女子参政権というものを受け入れた。農村は武家が支配していますから、武家の奥方は発言権がありません。しかし町衆の社会では、昔から女性の発言権があったと私は見ております。

**別府：**ありがとうございます。実は、松田さんと溝内さんと私と、いろいろ質問を練って持って参ったのですが、その半分位しか使いおせなかった。これはぜひ梅棹先生に又の機会に来てもらわないといけない、ということではないかと思います。今日は長時間に渡りまして、蘊蓄を傾けた先生のお考えをここで述べていただきまして、私もたいへん勉強になりました。聴衆の皆さんも勉強になったことと思います。これに啓発されまして、梅棹先生のお書きになったものが大学の図書館にたくさんありますので、進んでこれから読んで下さい。梅棹先生、どうもありがとうございました。

(拍手)

**青柳清孝**：司会の方から一言、述べさせていただきます。アルビン・トフラーとそれからダニエル・ベルというような名前を非常に懐かしく思い出しておりましたけれども、梅棹先生は、私今お話をお伺いいたしております、やはり一言で言えば、知的な予言者でありだというふうに思います。で、予言者と言うのはやはり、ある種のインスピレーションと言いますか、靈感というものがあると思います。じゃあそのインスピレーションというのはどこから出てくるかと言うと、これは、切磋琢磨して膨大な蓄積を手に入れ、それが整理される。その上になにかこういうインスピレーションが出てくるということだと思います。まあ、今日は大変色々感想を持ち申し上げたいことがありますけれど、これくらいにいたします。本当に今日は啓発される機会を与えて下さいまして、ありがとうございます。それでは、最後に短期大学学長さんの伊藤先生から、ご挨拶をいただきたいと思います。伊藤先生どうぞ壇上の方をお願いいたします。

**伊藤唯真**：私の挨拶は本当に蛇足になろうかと思いますが、一時間半に渡りまして、梅棹先生から質問形式、対話形式によりまして、いろんな問題についてお話をさせていただきました。情報と人類学、情報と民族学。或いは、情報の処理の方法についての学問的な方法論。或いは情報と女性と、情報産業と女性と。或いは、女性

と学問というようなことに話が及びまして、大変内容が豊かでございます、大いに啓発されるところがございました。そういった対話の中で人類学史、或いは民族学史、或いはその課題・将来と言ったようなことについても懇切にお触れいただきまして、感謝いたしております。

私自身は、専攻とするところの日本史などからいたしますと、先生が脱線されましたところに大いに興味深い点がございまして、特に日本の近代はいつから始まるか、或いは、この家制度の問題、日本の文化の根幹に関わる問題でありますし、この家制度にのっかった仏教がある時期に出来上がって、それが今も尾を引いているというようなことでございますが、それは仏教の長い歴史から見ますと、あるプロセスに過ぎないわけであります。人間、或いは人類・民族と大きな歴史の流れの中で今後どのように展開するか大いに検討、或いは勉強をさせていかだかねばならないところだと思っております。

本日はコーディネーターの別府先生、それからお二人の学生さん、本当にありがとうございました。それよりも何よりも、長時間貴重なお時間を我々の為に割いていただきました梅棹先生に対しまして、尽心の謝意を表したいと思います。先生ありがとうございました。

(拍手)